

76. 先史東アジア交流史と琉球・台湾の文化的距離の再検証

琉球大学国際地域創造学部 教授 後藤 雅彦

概要

東アジア交流史という視点での比較研究を進めるために、東南中国沿海地域及び台湾先史文化の動向として海をめぐる交流が活発化する時代（「広域交流化」の時代）を抽出し、琉球・台湾の文化的距離について再検討を行った。

研究期間の延長によって、2023年7月、2024年11月に台湾調査を実施し、台湾考古学の各地における最新の調査研究状況を確認した。前者は、琉球列島と距離的に近い台湾東海岸、花蓮の考古遺跡と出土遺物を実見した。東海岸では、海岸近くにおいても玉器文化、その背景としての農耕文化の定着が浸透しており、この点がやはり琉球列島との大きな違いとなると想定された。それでも漁撈関係の出土資料が多い点は海洋性の文化の一面も示すと理解できる。後者では、西海岸の台中・台南の遺跡を中心に実地調査を行った。また、南琉球において八重山諸島及び多良間島にて実地調査を実施できたことは、「島の個性」を理解する上で有効なものとなった。

本助成金により、台湾及び琉球列島における実地調査をふまえた比較研究を実施することができた。ご支援いただいた公益財団法人三菱財団に謝意を表したい。

背景および目的

本研究では、先史東アジア交流史の中で、琉球・台湾の文化的距離に関する研究史を再検証し、明確な出土資料から裏付けることのできていない状況を克服するための研究上の問題点の抽出と今後の展望を検討することを目的にしている。

琉球・台湾の文化的距離に関して、これまでも土器文化の大枠として、北琉球以北と南琉球以南の地域性（文化的字距離Ⅰ）が指摘され、最近では琉球の貝文化と台湾の玉文化という大枠（文化的距離Ⅲ）が捉えられている（陳 2022・2024）。こうした大枠によって、大きな地域差を捉えることができるが、地域差を小分けに捉えていくことも必要であろう。そこで、本研究では、文化的距離Ⅰ（沖縄本島－宮古島間）、Ⅱ（宮古島－八重山諸島）、Ⅲ（台湾－八重山諸島間）を設定し、比較研究を進める。

方法

本研究では比較研究にあたって空間的枠組みと時間的枠組みを次のように設定する。

まず、琉球・台湾の文化的距離を検証するために、北琉球と南琉球の比較、南琉球の中で八重山・宮古間の比較という地域間を細分化しながら、一方で東アジア交流史の中での位置づけを検証する。すなわち、台湾の対岸である東南中国の先史文化の動向を見ながら、琉球・台湾の文化的距離を検討する。

研究期間を延長した2023・2024年度は、琉球と台湾の同時代・同時期における交流を含めた文化的距離を捉えるために、台湾先史文化の輪郭を捉え、画期をつかむよう努めた。そして、研究成果報告の研究会（2024年2月18日石垣開催）では、①八重山諸島の状況を把握すること、②八重山と宮古の間にある多良間島の状況（文

化的距離Ⅱ)、さらに③台湾についてもっと情報が必要ではないかという課題を抽出し、2024年12月まで、これの3点を中心に補足調査を進めた。

東南中国において、筆者はⅠ期(紀元前6000頃)、Ⅱ期(前4000年以降)、Ⅲ期(前2500年頃)、Ⅳ期(前2000年以降)に時期区分しているが、Ⅰ期の東南中国の新石器文化成立期、Ⅱ期、Ⅳ期の中国初期国家形成期に沿海地域に文化交流の動きがあったと想定される。

さらに、台湾の状況を加えると、台湾鉄器時代の成立期としての今から2000年前の紀元前後、さらに時代が下って唐代の開元通宝の分布する段階も注目される。こうした動きを東アジア交流史の中で見直し、東南中国沿海地域の動きから、その延長線上に台湾との交流やその先に琉球列島が浮かんでくるか検証する。

結果および考察

台湾の先史時代について、旧石器時代－先陶文化時代－新石器時代(前期－中期－後期)、鉄器時代と時代区分がなされている(臧2016)。紀元前4000年以降の新石器時代前期(東南中国Ⅱ期)は、農業文化の初期段階である。大坌坑文化を代表とする。新石器時代中期・後期は、農業文化の発展する段階、中期が紀元前2500～1500年、後期が約1500～紀元前後(Ⅲ期～Ⅳ期相当)に相当する。台湾東部(東海岸)の花岡山文化は、海岸階地或いは溪口に立地、漁網錘が多く出土する一方、打製石斧・石鍬などの農具と考えられる石器も出土している。大量の玉製装身具、未成品などもあることから玉器製作が発達する。台湾東海岸では、海岸近くにおいても玉器文化、その背景としての農耕文化の定着が浸透しており、この点がやはり琉球列島との大きな違いとなるが、それでも漁撈関係の出土資料が多い点は海洋性の文化の一面を示すと理解できる。

ここで注目されるのが台中安和遺跡出土のサメ型玉飾であり、琉球・台湾の文化的距離(Ⅲ)を考える上で示唆に富むといえる。本調査で台中に赴いた際、実見することができたが、同遺跡は、約4800年前の大坌坑文化では48基の墓葬が確認された。46号墓の頸部近くからサメ型玉飾が出土し、13号墓からはサメ歯が出土している(屈2023)。また、台湾南部の鵝鑾鼻第一遺跡は、台湾新石器時代中期、今から3800～4200年前の貝器製作に関する重要な成果をあげている。同遺跡からは穿孔されたサメ歯製品が多く確認され、サメ歯を模倣したと推測されている牙型貝飾も出土している(邱・李2024)。本研究では、比較対象要素として、①漁網錘のように同じ目的が想定されるが、素材・形態が異なるモノ(琉球列島の貝錘、台湾の石錘)、②同じ素材を利用するが、目的は異なる可能性があるモノ(ヤコウガイ蓋製品)をあげて比較したが、サメ歯製品・模造品は、③同じ素材を利用する段階から異なる素材使用へと展開する点が特筆される。

サメを何らかの象徴とする点において、海洋性が伺え、それが琉球と台湾で共通することは注目されるが、模造品まで製作するにあたって、それが玉製か貝製か大きな違いが生まれる点は興味深い。陳氏による琉球の貝製品と台湾の玉製品の対比は、琉球列島の「北向きの心理意識」、台湾の「西方に偏向した文化的性格」を表しているとし、文化的交流に客観的な自然環境、言語や民族グループが影響しているのは言うまでもなく、さらに「主観的な意識」も一つの決定要因ではないかと指摘している(陳2024)。

また、陳有貝は、台湾へ人の移動の時期として、紀元前4000年の第一次移動、紀元前後の第二次移動、第三次移動：紀元前後以降の第三次移動(東南アジア沿海から少数か?)をあげている(陳2022・2024)。台湾への第一次移動の時期は、東南中国沿海地域でも動きのある時期(Ⅱ期)であり、台湾への移動を鑑みると「広域交流化」の時代と考えることもできる。但し、この移動に農耕文化も伴う点が、琉球との文化的距離を考えると大きな違いとして捉えざるをえない。

東南中国の先史文化の動向については、東南中国沿岸島嶼の状況を再検討してみると(後藤2025)、Ⅲ期は、閩江下流域に近い沿岸島嶼における居住は低調となるが、福建南部沿岸島嶼では、貝塚遺跡が形成されている(大帽山遺跡)。沿岸島嶼といっても、大陸部との距離や島自体の自然環境によって、継続的な居住が可能であったと考えられる。また、大帽山遺跡の出土土器に台湾の遺跡との類似性が認められることは、同時期においても海を越えた文化交流が想定されるが、Ⅳ期に広範囲に共通性が生まれる「広域交流化」の時代とは異なる様相を示している。持続—低調・衰退—再生という島の居住サイクルは、島嶼ごとに多様な展開、すなわち「広域交流化」に対して「島の個性」が顕在化したと考えることができる。Ⅳ期の文化交流の動きは、沿岸島嶼を含めて東南中国における地域間交流を拡大し、持続—低調・衰退—再生という島の居住サイクルがある程度一致するとい

う外から影響が直接的に地域社会に及んだ状況がうかがえ、「広域交流化の直接的影響」の結果と言えるのかもしれない。但し、「広域交流化」が琉球列島に波及したか、現時点では、具体的な資料を例示することは難しい。

そして台湾への第二次移動の時期は、台湾からさらに周辺、琉球列島へ何らかの影響があったか、「広域交流化」が形成されていたのか検討が必要である。琉球列島にこの時期に限定的にはあるが出土する中国銭貨が目される場所である。台湾の鉄器時代は、台湾島内外の交易を志向する時期といえるが、琉球列島においても北琉球では、貝塚時代後期（弥生時代～平安時代 頃に併行）は、九州などとの交易と、沖縄諸島内に拠点集落の形成なども推定され、交易活動が活発になっていることが読みとれる。

また、南琉球においても、無土器期になると、海岸砂丘上に遺跡が多く、島々で形成されるようになる。本研究で踏査を実施した八重山諸島の黒島のように、発掘調査が実施されていない島においても同時期の遺跡が確認できる。とくにその後半で鉄製品や中国銭貨が限定的であるにも関わらず八重山諸島で出土する点は注目され、周辺地域からの間接的な影響がうかがえ、「広域交流化の間接的影響」があった可能性を指摘することができるのではないかと。こうした先史文化の動向について、さらに「島の個性」を十分にふまえることが琉球・台湾の文化的距離を探る上でも課題であると考えられる。

(完)

発表論文

- 1) 2023 年 1 月 7 日 2022 年度日本中国考古学会のポスターセッション 後藤雅彦・主税英徳「先史東アジア交流史と琉球・台湾の文化的距離の再検証 (1)」 (『2022 年度 日本中国考古学会大会 予稿集』日本中国考古学会、2023 年 1 月 7 日発行、123-130 頁)
- 2) 2023 年 12 月 17 日 2023 年度日本中国考古学会のポスターセッション 後藤雅彦・主税英徳「先史東アジア交流史と琉球・台湾の文化的距離の再検証 (2)」 (『2023 年度 日本中国考古学会大会 予稿集』日本中国考古学会、2023 年 11 月 25 日発行、95-100 頁)
- 3) 後藤雅彦編 2024『先史東アジア交流史と琉球・台湾の文化的距離の再検証 資料集』

引用文献

- 1) 邱鴻霖・李匡梯 2024『南岬逆時光 - 鵝鑾鼻考古探索』内政部国家公園署墾丁国家公園管理處
- 2) 屈慧麗 2023『中部人説故事 兼録黄炫星先生捐贈水蛙窟遺址標本』国立自然科学博物館
- 3) 後藤雅彦 2025「福建南部沿海地域の先史文化」『地理歴史人類学論集』14、pp.117-124
- 4) 臧振華 2016「台湾原住民の源流 - 考古学的証據與觀點」『考古、歴史與原住民：台湾族群關係新視野』pp.33-71、順益台湾原住民博物館
- 5) 陳有貝 2022『山林裡的南島語族 台湾原住民群的形成論』華藝學術出版部
- 6) 陳有貝 2024『台湾考古学』雄山閣